

Inquisitiveness は人々を幸せにするか？

1210558 吉岡 愛香音

高知工科大学 経済・マネジメント学群

1. 概要

Inquisitiveness は、違いや新しさに対する好奇心と受容度からなる概念である。この Inquisitiveness は、人が人と関係を築き始める際の主たる原動力とも考えられている。既存研究によると、友人や家族、一般他者との良好な関係の維持や Generativity は、幸福度に影響を与えることが分かっている。しかし、Inquisitiveness が、幸福度にどのような影響を及ぼすかは研究されていない。そこで、本研究は、

「Inquisitiveness は、幸福度の根本的な決定要素である」と仮説を設定し、調査・検証する。本仮説検証の為、400 名の日本人を対象にしたアンケート調査・データ収集をし、統計分析を行った。中央値回帰分析の結果から、高い Inquisitiveness を持つ人ほど幸福度が高いということが分かった。これらの結果から、違いや新しさに対する好奇心と受容度は幸福度を決定づける重要な性質であると考えられる。

2. 序論

好奇心と受容性は、人間が創造性や充実感、新たな視野を得るための重要な要素であることが分かっている (Kashdan et al. 2009)。このような傾向は「Inquisitiveness」として概念化されている。Frazier et al. (2009) は、大人と幼児の会話のやり取りを検証しており、そのようなコミュニケーションは、子どもが人との関わりの中でどのように成長していくのかという点で、子どもの今後の人生における重要な基盤となると主張している。さらに、家族や友人、一般他者と良好な関係をもち、それを維持することや Generativity は幸福度に影響を与えることも明らかにされている (McAdams and Aubin 1992, Huta and Zuroff 2007)。Inquisitiveness を持つ人は、質問をすることで他者とのコミュニケーションを開始する傾向がある (平山・楠見 2004)。このような状況を考えると、違いや新しさに対する好奇心と受容性は、人々が異なる世代の人々と交流するだけでなく、人々を幸せにする要因であるかもしれないと考えられる。本研究は、「Inquisitiveness は、幸福度の根本的な決定要素である」

と仮説をたて、検証する。

現代社会では、well-being（健康で幸せである状態）や Happiness（幸せ）は、人々が幸せを求めて行動することを前提とした「良い人生」の結果を表す言葉として捉えられている。Diener (1995) は、国ごとに見られる幸福度における変動を、富がある程度説明できると結論付けた。しかし、他にも重要な予測因子があるはずだと結論づけてもいる。平山・楠見 (2004) は批判的思考性向のサブスケールとして Inquisitiveness の尺度を開発した。Inquisitiveness は、寛容さを持って質問する動機や行動によって増大する強力なメカニズムであり、人々に他者とのコミュニケーションや、慣れない環境にふれるきっかけを与えると考えられている (Baldwin and Moses, 1996)。

Inquisitiveness はコミュニケーションのきっかけとなる重要な因子と考えられており、良好な人間関係の維持に貢献すると推測されている。そこで本研究では、「Inquisitiveness は幸福度の根本的な決定要素である」と仮説を設定し、主観的幸福度を応答変数とする中央値回帰分析に主要な説明変数として Inquisitiveness を据え、認知的要因と社会人口統計学的要因をコントロール変数として説明変数に加え、Inquisitiveness が主観的幸福度に与える影響を検証する。

3. 実験手法

日本のウェブ調査研究機関であるクロス・マーケティング株式会社の登録者プールから、日本人 400 名の被験者を対象にアンケート調査を実施した。被験者は 20 歳から 88 歳の男女である。平均年齢は 47.79 歳、標準偏差は 16.74 である。本調査には、年齢、性別、世帯年収、学歴などの社会人口統計学的要因と、Generativity（次世代を導く上での関心事）、主観的幸福度 (SWB)、Inquisitiveness も含まれている。本調査で収集した変数は、主観的幸福度との関係で認知的要因と社会統計学的要因に分類することができる。人生満足度は幸福度の一部である。(Bibi et al.) SWLS は、人生満足度の尺度として確立されており、幸福度 (SWB) の研究分野の中心的な概念であ

る Diener et. al, (1985)。本調査では、被験者の人生満足度を測定するために、人生満足度尺度 (SWLS) (Bibi et al. 2015) を採用している。Diener et. al, (1985) において、人生満足度の測定と検証は、年齢、国、性別を超えて実施されている。人生満足度には、感情的なもの、内在的なもの、外在的なものがある。GBC は Generativity の評価によく用いられている尺度であるが、質問項目には現代の日本人には難しいと思われるものもある。例えば、「他人の子供のためにベビーシッターをしていた」、「日曜学校で教えていた」、「親になった (子供を持つ、養子縁組をする、里親になった)」などが挙げられる。よって、LGS を用いて被験者の Generativity を測定することにした。LGS の項目には、(1)「経験を通して得た知識を伝えようとしている」、(2)「大切なスキルを持っていて、人に教えようとしている」、(3)「多くの人に影響を与えたと感じている」、(4)「人に影響を与えたものを発明した」、(5)「人生の中で多くの種類の人やグループ、活動にコミットしてきた」、(6)「慈善活動のためのボランティアはしていない」などの記述がある。ここでは、(6)は逆の質問項目と考えられる。被験者は、各質問文について4つの選択肢から1つを選択する必要がある。「0」、「1」、「2」、「3」の点数は、その記述がどの程度の頻度でそれぞれの質問に当てはまるかを示している。記述が全く当てはまらない場合は「0」、非常によく当てはまる、またはほぼ常に当てはまる場合は「3」を選択する。逆問題においては、逆の得点として計算する。つまり逆の質問項目では、0が3になり、1が2になり、2が3になり、3が0になる。この尺度は全部で20問の質問項目で構成されている。よってLGSの合計点の範囲は、理論上0から60の間になる。

本調査では、平山・楠見(2004)が開発した批判的思考態度尺度のサブスケールである Inquisitiveness 尺度を採用している。この尺度は人々が持つ、違いや新しさに対する好奇心と受容度からなる概念である。Inquisitiveness を測る質問項目は、以下の10項目で構成されている。(1)「様々な考え方の人と交流し、多くのことを学びたい」(2)「生涯を通じて新しいことを学び続けたい」(3)「新しいことに挑戦することが好

き」(4)「様々な文化を学びたい」(5)「外国人の考え方を学ぶことは自分にとって意味がある」(6)「考え方の違う人に興味がある」(7)「どんな話題でももっと知りたい」(8)「役に立つかどうかわからなくても、できるだけ多くのことを学びたい」(9)「自分とは違う考え方を持っている人と議論するのは面白い」(10)「わからないことがあれば誰かに聞いてみたい」。質問項目は、1＝「強く同意しない」から5＝「強く同意する」で評価する。理論的にはこの尺度の合計点は10から50の間になる。

本調査で得た変数である、主観的幸福度、Inquisitiveness、Generativity はアンケート調査によってそれぞれの特性を測定するために、複数の質問項目への回答の合計値(尺度得点)を利用している。したがって尺度に含まれる個々の質問項目が内的整合性を持つかどうか、つまり目的とする質問項目群であるかどうかを、クロンバック検定を用いて判定する。検定で得られるクロンバック α 信頼係数は0から1までの値を取り、1に近いほど信頼性が高いと言える。検定結果から、主観的幸福度のクロンバック α 係数は0.93、Inquisitiveness のクロンバック α 係数は0.94、Generativity のクロンバック α 係数は0.90であることが示された。検定結果から、これらの3つの尺度得点は内的整合性を持つと言える。世帯年収については、質問項目において、年収100万円未満なら1、100万円から250万円未満ならば2、250万円から400万円未満ならば3、400万円から700万円未満ならば4、700万円から1000万円未満ならば5、1000万円以上ならば6と数値での回答を得た。

学歴についての質問項目において、最終学歴が未就学ならば1、中学校卒ならば2、高校卒ならば3、大学卒(短大含む)・専門卒ならば4、大学院卒ならば5と数値で回答を得た。前述の変数のデータをもとに、統計ソフト STATA による中央値回帰を利用して仮説「Inquisitiveness は、幸福度の根本的な決定要素である」を検証するために、「Inquisitiveness が幸福度に正の影響を与えるか」を分析する。主観的幸福度を応答変数とし、Inquisitiveness を主要な説明変数とする中央値回帰モデルに、コントロール変数として認知的要因である

Generativity、社会人口統計学的要因である世帯年収、学歴、性別、年齢を加えた。

4. 結果

表1は回帰分析に使用したデータの要約である。主観的幸福度の平均値は17.67で、中央値は19.0、標準偏差は6.64だった。標準偏差の値から、被験者の主観的幸福度にはばらつきがあることがわかる。Inquisitivenessの平均値は32.24で、中央値は32.0、標準偏差は7.30だった。標準偏差の値から、被験者のInquisitivenessにばらつきがあることが分かる。Generativityの平均値は25.25、中央値は26.0、標準偏差は9.87だった。標準偏差の値から、被験者のGenerativityにはばらつきがあることがわかる。世帯年収の平均値は3.72で、中央値は4.0だった。世帯年収が400万円から1000万円未満の世帯が多くを占めることが分かる。学歴の平均値と中央値から、ほとんどの人が高卒者か大卒者（短大卒者含む）、専門卒者であることがわかる。性別ダミーの平均値から、被験者の53%が男性だったことがわかる。応答変数である主観的幸福度は多変量尺度（SWLS）で測定される。これらの尺度は、多くの場合、平均値が外れ値に影響を受けやすいため、中心傾向の適切な尺度とはならない。そのため、特定の分位点で分析を行う、分位点回帰（中央値回帰分析）を採用した。

表2は、中央値回帰分析によって推定された係数とそれぞれの標準誤差、有意水準を示している。モデル3では、Generativity、Inquisitiveness、年齢、世帯年収、男性ダミー、学歴を説明変数とした。モデル3において、Inquisitivenessは、5%の有意水準で主観的幸福度に正の効果を持つことが示された。また、世帯年収が1単位増加すると、つまり世帯年収が次のカテゴリに移動した場合、被験者の主観的幸福度は増加する傾向があることがわかった。他の説明変数である学歴や性別はモデル3の推定結果が示すように、統計的に有意ではないことが確認された。学歴や性別の違いは、主観的幸福度には影響を与えないと言える。Generativity、Inquisitiveness、年齢が、統計的にも実質的にも有意な主観的幸福度の主な決定要因であることが確認された。

5. 結論

本研究では、「Inquisitivenessは、幸福度の根本的な決定要素である」と仮説を立て、調査・検証した。400名の日本人を対象にしたアンケート調査・データ収集をし、統計分析を行った。中央値回帰分析の結果から、高いInquisitivenessを持つ人ほど幸福度が高いということが分かった。これらの結果から、違いや新しさに対する好奇心と受容度は主観的幸福度を決定づける重要な変数であると考えられる。

本研究では、変数間の関係を十分に明らかにしていない。その為、主観的幸福度に与える各説明変数の直接的、且つ、間接的影響について、分析の余地がある。Inquisitivenessは主観的幸福度に正の影響を与えているが、その効果の大きさをどのように解釈するか、直接的、且つ、間接的影響も踏まえながら検討しなければならないだろう。だが、いずれにしても、Inquisitivenessは主観的幸福度に正の影響を何らかの形で与えており、Inquisitivenessは人々の幸福に寄与すると思われる。この事を統計的に確立出来た事が本研究の意義である。

参考文献

- ・Baldwin, D. and Moses, L. (1996). The ontogeny of social information gathering. *Child development*, 67:1915-1939.
- ・Bibi, F., Chaudhry, A., and Awan, E. (2015). Impact of gender, age and culture on life satisfaction. *Science international*, 27:1649-1652.
- ・Diener, E., Emmons, R., Larsen, R., and Griffin, S. (1985). The satisfaction with life scale. *Journal of personality assessment*, 49:71-75
- ・Diener, E. and Diener, M. (1995). Cross-cultural correlates of life satisfaction and self-esteem. *Journal of personality and social psychology*, 68:653.
- ・Frazier, B., Gelman, S., and Wellman, H. (2009). Preschoolers' search for explanatory information within adult-child conversation. *Child development*, 80:1592-1611.

- Fusaro, M. and Smith, M. (2018). Preschoolers' inquisitiveness and science-relevant problem solving. *Early childhood research quarterly*, 42:119-127.
- Huta, V. and Zuroff, D. (2007). Examining mediators of the link between generativity and wellbeing. *Journal of adult development*, 14:47-52.
- Kashdan, T., Gallagher, M., Silvia, P., Winterstein, B., Breen, W., Terhar, D., and Steger, M. (2009). The curiosity and exploration inventory-II: Development, factor structure, and psychometrics. *Journal of research in personality*, 43:987-998.
- Lagattuta, K. and Wellman, H. (2002). Differences in early parent-child conversations about negative versus positive emotions: Implications for the development of psychological understanding. *Development psychology*, 38:564-580.
- McAdams, D. and Aubin, E. (1992). A theory of generativity and its assessment through selfreport, behavioral acts, and narrative themes in autobiography. *Journal of personality and social psychology*, 62:1003-1015.
- 平山るみ, 楠見孝. (2004). 批判的思考態度が結論導出プロセスに及ぼす影響. —証拠評価と結論生成過程を用いての検討—, *教育心理学研究*, 52: 186—198.

表1 データ要約

変数	平均値	標準偏差	中央値	最小値	最大値
Inquisitiveness ¹	32.24	7.30	32.0	10.0	50.0
Generativity ²	25.25	9.87	26.0	2.0	51.0
年齢 ³	49.79	16.74	50.0	20.0	88.0
世帯年収 ⁴	3.72	1.37	4.0	1.0	6.0
学歴 ⁵	3.60	0.62	4.0	1.0	5.0
性別 ⁶	0.53	0.50	1.0	0.0	1.0
主観的幸福度 ⁷	17.67	6.64	19.0	5.0	35.0

¹数値が高くなるほど、他者への好奇心や受容性を持つ傾向がある。

²数値が高くなるほど、Generativityが高い。

³実年齢

⁴数値が大きいほど年収が高い。

⁵数値が高くなるほど学歴は高い

⁶ダミー変数(男性 = 1, 女性 = 0)

表2 Results of median regression on subjective well-being

Variable	Marginal effect		
	Model1	Model2	Model3
Inquisitiveness	0.036*** (0.011)	0.021* (0.011)	0.022** (0.010)
Generativity		0.058*** (0.008)	0.051*** (0.007)
age			0.011*** (0.004)
Household income			0.126* (0.052)
education			0.063 0.116
Gender dummy (Female = 0, Male =1)			-0.215 (0.143)

括弧内の数値は標準誤差を表す。***, **, *印は1%、5%、10%水準で有意であることを示す。